

借りるのだが)オーケストラだけで三万八千ドルもかかったという。ふつうはオーケストラだけのリハーサル三回、歌手とのジップローベ(歌手は衣裳をつけず、イスに座って、演技もしない)一回、ドレス・リハーサル(ゲネラルローベ)一回、本番三回(三日間)で計八回なのだ。、「サロメ」はリハーサルを五回余計にやったためだ。

アルバータ州の人口は百六十万、州予算は三十億ドルで、そのうち文化関係予算は七百万ドル、パフォーミング・アーツの予算はまたそのうちの二百五十万

ドルで、まだまだ全体の予算からみれば九牛の一毛だが、もつと重要なことが他にあるから、いま以上に文化に力が入るとは思わぬ、と音楽関係者は言う。同州の主産業は石油だが、やはり基本的には農業で、州議会の大半はプロGRESSIVE CONSERVATIVE(進歩保守党)、失業率は九・五%という。土産物としては毛皮やダイヤモンドが、この州だけ買利物にセールズ・タックスがかからないのは、州財政が豊かなためなのだろうか。ちなみにエドモントン響の入場料は最高八ドルという。今の東京のオーケストラもS席二千八百円、A席二千四、五百円が相場だ、カナダとそう変わらないと思ったが、彼我間の給料の差などを考えると、相対的にはカナダが安いことになりそうだ。東京にはウィーン・フィルとかシカゴ響とかの世界一流のオーケストラが今年も来るが、入場料は一万二千元で、それでも満員になる一方、日本のオーケストラはなかなか満員にならないと、トロントの新聞グローブ・エント・メールの音楽批評家に話したら、早速新聞に書かれてしまった。カナダのアーティストやインプレサリオに会うと、みんな日本に行きたがり、行かせたがっているが、やはり日本の事情にはうとくて(我々がカナダの音楽事情にうといよ)、東京には今年、海外から六つも国際的に有名なオーケストラが来るなんてことは知らない。日本の音楽ファンにも多少スノビッシュなところがあつて、とにかくレコードが沢山出ていて、国際的に有名でない、いくら実質ではすぐれたアーティストでも客が集まらないのだと説明することは、中々苦痛であつた。



秋山和慶氏が指揮するバンクーパー交響楽団

カナダに来て、うらやましく思ったのはダンス芸術の盛んなことで、国や州も力を入れていることだった。日本ではモダン・ダンス「カンパニー」は、一つも無いに近いが、バンクーパーではアナ・ワイマン・ダンス・シアターがわざわざ本番同様の公演を持ってくれたり、トロント・ダンス・シアターもスタジオに招いてくれた。ともに十人余りで、旅興行には手頃な小人数だし、見ても大へん興味深かったし、先方もとても日本に来たがっている風であつたが、日本でモダン・ダンスというジャンルは全く客の動員

力がないことを納得の行くように説明するのは、むずかしい事だった。バレエのカンパニーも行く先々にあつて、シーズンは終っているため、本公演の見られたのは、旅行の最後の日の、モントリオールのレ・グラン・バレエ・カナディアンだけだった。これと並んでカナダの三大バレエ団だという、ロイヤル・ウィニペグ・バレエ団の「くるみ割り人形」や、トロントのナショナル・バレエ・オブ・カナダの「ジゼル」は、ビデオで見せてくれた。バレエなら日本でも観客が多いのではないかと。後者にはカレン・ケインという若いバレリーナがいて、私が夜たまたま見たテレビでも、彼女をフィーチャーした一時間番組をやつていて、彼女にかける期待の程がうかがえた。ナショナル・バレエの創立が一九五一年、モントリオールのグラン・バレエは五八年と、新しい団体なのだが、私の見た後者の「ロメオとジュリエット」は、チャイコフスキーやプロコフィエフの有名な曲ではなく、あらかじめ俳優によって録音されたシェークスピアの戯曲の韻文のやりとり(私の見た晩はフランス語だが、英語の日も一日ある)に合わせて踊り、音楽は時たまルネッサンス時代調のものが古式ゆたかに数人のユケット・ファミリィで実演されるだけという、生まれてからこのかたお目にかかった事がない異色さで、そのすばらしさにたまげてしまった。振付はこの芸術監督のアリアン・マクドナルドという人である。カナダの芸術は、先行きこわいくらいに高度成長するのではあるまいか。